2-3 目的別必須機材──撮影を快適に進めるための道具──

どのような場合でも必須というわけではないが、撮影目的によっては必須となる機材を紹介しておこう。
「画像管理ソフト」「携帯型ストレージデバイス」「ノートパソコン」「大型ディスプレイ（モニタ）」「大容量ハードディスク」「交換レンズ」「テレ／ワイド コンバージョンレンズ」「強力ブロアー」「外部ストロボ」「イメージスキャナ」

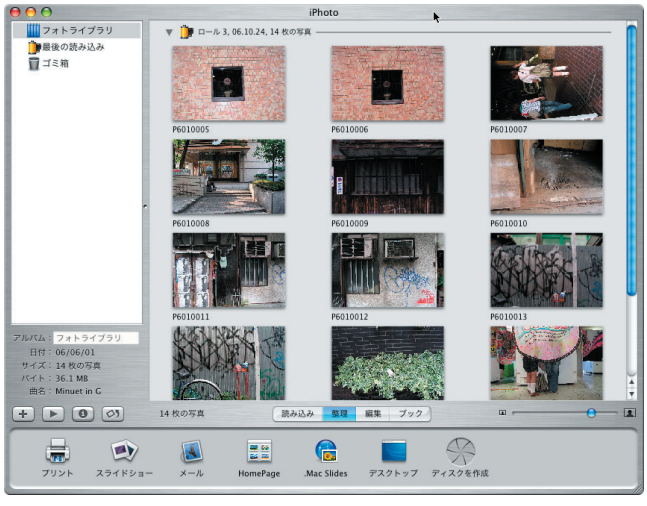
画像管理ソフト

画像処理用としては、書籍で紹介したPhotoshop（または同等の機能を持った画像処理ソフト）が必須だ。そのほかに、パソコンのハードディスクに保存した画像データをサムネイルと呼ばれる小さな見本画像で並べて表示したり、拡大表示して細部を確認したり、フォルダからフォルダへコピーや移動したりする画像管理ソフトがあると便利だ。

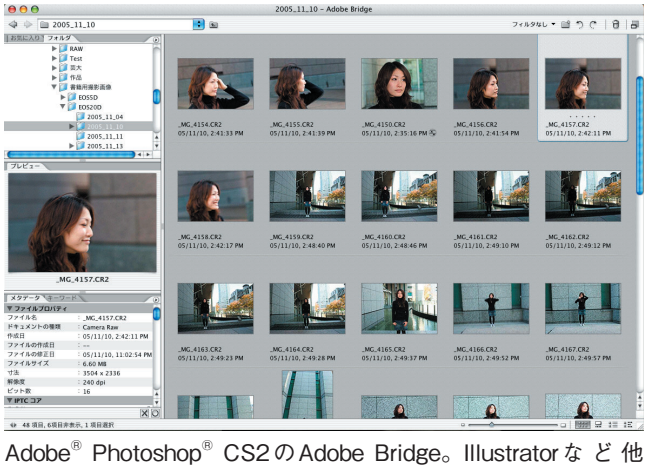
Macにプリインストールされている iPhotoという画像管理ソフトを使ってもいいだろう。その他、デジカメに付属しているソフトも使える。また、Photoshop CS※1のファイルブラウザ機能やCS2以降に付属するAdobe Bridgeも便利だ。

こういったソフトはたくさんあっても邪魔になるだけなので、使いやすいものを1つ決めておくのがいい。

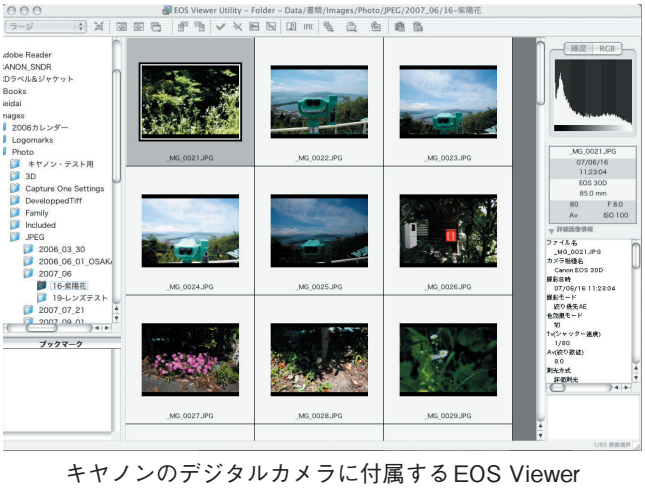
※1 CSは“Creative Suite”の略。デザイン用ソフトのIllustrator（イラストレーター）などAdobe社の一連の画像処理ソフト群に付けられた名称。Photoshopの正式なバージョンはCSが8、CS2が9、CS3が10。



Appleの iPhoto



Adobe® Photoshop® CS2のAdobe Bridge。Illustratorなど他のソフトともデータ共有できる



キヤノンのデジタルカメラに付属するEOS Viewer

携帯型ストレージデバイス

ストレージデバイスとは、ハードディスクなど大量のデータを蓄積するための装置である。それを持ち運べる形にしたものが携帯型ストレージデバイスだ。屋外での長時間撮影に役立つ。

撮影中にメモリカードが満杯になったとき、データをストレージデバイスにコピーしてメモリカードのデータを削除（または初期化）すれば、撮影を続けられる。

携帯型ストレージデバイスと言えば、ノートパソコンに外付けするUSB方式の小型ハードディスクが知られているが、デジカメ撮影ではメモリカードを読み込める電池駆動の小型ハードディスクが便利だ。パソコンを使うことなく、メモリカードのデータを直接ハードディスクにコピーできる。

メモリカードを複数用意しているなら、メモリカードのデータを消さずに残しておき、携帯型ストレージデバイスのデータをバックアップとするほうがより確実だ。

電池駆動のフォトビューア付き携帯型ストレージデバイス。デジカメのデータをその場でハードディスクにコピーできる（写真は飛鳥のTripper V）

ノートパソコン

ノートパソコンとUSB方式のカードリーダーを携行していれば、出先でメモリカードのデータをハードディスクにコピーできる。コンパクトフラッシュ（CF）ならPCカード（PCMCIA）スロットに差し込んで使えるCFカード用のアダプタで用が足りるので、カードリーダーは不要だ。CFカード用のスロットを備えたノートパソコンもある。

ただノートパソコンは、携帯型ストレージデバイスに比べて大きさと重さ、稼働時間がネックとなる。また、データを読み込むたびにパソコンのトップカバー（液晶画面）を開けて起動しなければならないため、作業に手間がかかる。その点に目をつむれば、携帯型ストレージデバイスの代わりとして使える。

ノートブック機能を凝縮したマイクロボディのモバイルPC（写真は7型ワイド液晶を採用した工人舎のSH8KP12）

大型ディスプレイ（モニタ）

ディスプレイは当然必須だが、いくつか押さえておきたいポイントがある。画面の大きさ、解像度（ピクセル数）、コントラストなどである。

まず画面の大きさだが、あまり小型だと細部の確認ができない。CRT（ブラウン管型）なら17インチ、液晶なら15インチ程度のごく一般的なディスプレイでももちろん作業はできるが、じっくり確認しながら画像処理を施すならCRTで19～21インチ、液晶で17インチ以上の大型ディスプレイを使いたい。

解像度は1280×1024ピクセル以上表示できるものがいいだろう。低価格な液晶ディスプレイでは1024×768ピクセルが一般的だが、これでは大きな（解像度の高い）画像を扱うのに不便だ。特にPhotoshopを使う場合、画面の左右に小さなウィンドウ（ツールボックスとパレット）が表示されるため、解像度の低いディスプレイだと肝心の画像を表示する面積が狭くなってしまう。

最近は横長のワイド液晶ディスプレイが人気だ。横幅に余裕があるので、Photoshopには好都合だ。解像度は1440×900ピクセル以上のものを選びたい。

コントラスト（輝度比）が高く発色のよいものを選びたい。その点では液晶よりCRTのほうに分がある。が、最近はコントラストが高く発色のよい液晶ディスプレイも登場している。消費電力の面からも、電源を入れてから発色が安定するまでの時間も液晶のほうが有利だ。

解像度の高い作品を制作するなら、19～21インチのCRTか、1280×1024ピクセル以上表示できる17インチ以上の液晶、あるいは19～20インチのワイド液晶がお奨めだ。なお、液晶ディスプレイでは表面に光沢処理を施したものが多く出回っているが、照明や外部の光を反射しやすいので、避けたほうがいい。画像処理には表面のざらっとした無反射（ノングレア）タイプのほうが向いている。

大容量ハードディスク

高解像度の画像データはサイズが大きいため、保存には大容量のハードディスクが必要だ。加工作業だけなら60～100ギガバイト程度のディスクを搭載したパソコンでも十分だが、画像データを恒常的に保存するにはそれでは足りない。

別途200ギガバイト程度（あるいはそれ以上）の外付けハードディスクを用意し、そこに保存しておくのがいいだろう。DVD-Rなどに保存することも大切だが、パソコンで瞬時に開いて手を加える場合、読み書きが速く自在にデータを書き換えられるハードディスクのほうがはるかに便利だ。

USB接続の大容量外付けハードディスク（写真はアイ・オー・データ機器のHDCN-U250）

交換レンズ

デジタル一眼レフではズームレンズを使うことが多いようだが、やはり単焦点レンズは魅力的だ。最近のズームレンズは性能が向上したが、単焦点レンズの描写力にはかなわない※2。画質という観点から見た単焦点のメリットは、銀塩もデジタルも同じである。

メーカー純正にこだわらなければ、シグマやタムロンなどのサードパーティー製レンズも価値がある。また、ズームレンズを使う場合でも、高倍率ズーム1本より低倍率ズームを数本用意しておいたほうがいい。

もしあなたがフィルムカメラ用のレンズを持っているなら、それをデジタル一眼レフに使ってもいいだろう。が、フィルムカメラ用のレンズはデジカメで使うには無理があるのも事実だ。本気でデジタル一眼レフを使いこなしたいなら、デジタル専用の単焦点または低倍率ズームレンズを用意しておきたい。

※2 鏡胴内でレンズの位置が変わるズームレンズは、波長の異なるRGB各色の屈折率の差によって生じる周辺部の色ズレ（収差）を完全に補正することが困難なため、単焦点レンズに比べて画質が落ちる。が、最近のズームレンズは周辺部の収差を極力補正し、画質はかなり向上している。

テレ／ワイド コンバージョンレンズ

レンズ交換のできないレンズ固定式一眼レフやコンパクト型のカメラでは、望遠用にはテレコンバージョンレンズ、広角用にはワイドコンバージョンレンズを装着することで、限界焦点距離を延ばしたり（テレ／望遠）、縮めたり（ワイド／広角）できる。

単焦点レンズに比べれば画質は劣るが、それでも焦点距離の限界を拡張できる点で有利だ。プロはコンバージョンレンズなんて使わない――と、思っている人もいるかもしれないが、そんなことはない。プロは、いざというときに使えるものは何でも使う。

ワイドコンバージョンレンズ
（写真はオリンパスのWCON-08D）

ワイドコンバージョンレンズ未使用

ワイドコンバージョンレンズ使用

強力ブロアー

デジカメの撮像素子に付着した埃を吹き飛ばすには、一般的なゴムブロワーでは非力だ。撮像素子はフィルムと違って常に同じ面が外気にさらされている。一度埃が付くと、その跡は以降のコマにずっと残り続ける。絞りを5.6以上にすると特に目立つから厄介だ。

デジタル一眼レフは、ミラーを上げてシャッター膜を全開にし、撮像素子に付いた埃を掃除できるようになっている。強力ブロアーやエアスプレーなどの強力な空気圧で、時々埃を吹き飛ばしておこう。なお、エアスプレーを逆さまにして撮像素子に吹き付けないこと。急激な冷却で霜が付着するため、溶けた水滴が故障の原因となる※3。

また、屋外でシャッター膜を全開にすると、逆に埃が付いてしまうこともある。それを防ぐために、オリンパスの一眼レフに採用されている、超音波で撮像素子の埃を取り除くというダストリダクション・システムのように、撮像素子に付着した埃を超音波で除去する製品もある。

※3 最近では、逆さまに噴射しても水滴の出ないエアスプレーも登場している。下図に掲げたエツミのスプレーもその1つ。

強力ブロアー（写真はエツミのウルトラジャンボブロア）

エアスプレー（写真はエツミのハイパークリーンエコ330）

外部ストロボ

デジカメにはストロボを内蔵している機種が多いが、小型のため光量が少ない。また、被写体の正面からしか照射できないという欠点がある。デーライトシンクロ※4など補助光として使う程度ならよいのだが、広角レンズで夜間撮影を行うような場合には無理がある。

そういった場合、大型の外部ストロボが必要だ。カメラメーカーが専用として販売しているものならまず安心だが、サードパーティー製のデジタル一眼レフ対応ストロボやフィルムカメラ用のストロボでも構わない。

ただし、フィルムカメラ用ストロボの特に古い機種では、光量によって色温度（光の持つ色の傾向）が変わるものがあるため注意が必要だ。

※4 日中シンクロとも言う。逆光などで暗くなる部分にわずかなストロボ光を当て、暗部を描写する撮影手法。

イメージスキャナ

銀塩のフィルム画像をデジタルデータとしてコンピュータに取り込む装置。アナログ画像はデジタル処理と無縁だと思う人もいるかもしれないが、実のところアナログ画像をデジタル化する機会は意外と多い。

フィルム専用のフィルムスキャナのほか、文書類などを取り込むフラットベッドスキャナに補助装置（透過光ユニット）を取り付けてフィルムの画像を読み込める製品も多い。

フィルム専用の場合、35ミリ専用の他に中・大判フィルムも扱える製品があるが、概して高価だ。フラットベッドスキャナはモノクロのプリントにも使えるほか、中・大判フィルムにも対応しているものが増えてきた。画質はフィルム専用品より劣るが、ツブシの利くところが大きなメリットだ。

35ミリ専用フィルムスキャナ（写真はニコンのSUPER COOLSCAN 5000 ED）